

7.2 日本特殊教育学会 第47回大会自主シンポジウム資料

ICFの学校現場への適用 VI

—あらためて、特別支援教育においてICF-CYを活用する背景に迫る—

企画者・司会者	徳永亜希雄（国立特別支援教育総合研究所） 松村 勳由（国立特別支援教育総合研究所）
話題提供者	徳永亜希雄（国立特別支援教育総合研究所） 松村 勳由（国立特別支援教育総合研究所） 齊藤 博之（山形県立上山高等養護学校） 田添 敦孝（東京都立墨東特別支援学校） 川口ときわ（静岡県立中央特別支援学校）
指定討論者	島 治伸（徳島文理大学）

KEY WORDS: 特別支援教育 ICF-CY 背景

【企画趣旨】

「ICFの学校現場への適用」というテーマでのシンポジウムを5回にわたり開催し、学校現場でのICF/ICF-CY(ICF児童版)活用について検討を続けてきた。①中央教育審議会答申(2008年1月)での特別支援学校の学習指導要領等の改善のためにICFの考え方を取り入れる必要性の指摘及びICF-CY日本語訳版検討の動きを受けて特別支援教育の中でのICF-CY活用の拡大が予想されること、②特別支援教育の中でのICF-CY活用の有効性とともにより具体的な方法論等を検討する必要性が先行研究で指摘されていること等を背景にしながら、国立特別支援教育総合研究所では、「特別支援教育におけるICF-CYの活用に関する実際的研究(平成20～21年度)」に取り組んでいる。本シンポジウムでは、今後の本格的な活用に向け、特別支援教育の中で何を解決又は改善するためにICF-CYを活用しようとするのか、その背景についてあらためて検討することにした。

【話題提供の要旨】

1 質的分析及び量的調査の結果から(徳永、松村)

特別支援教育におけるICF/ICF-CY活用の背景や成果、課題等を明らかにするため、これまで特別支援教育の中でICF/ICF-CYを活用したことがある又は活用しようとしたことのある人へのグループインタビューを実施し、質的な分析を行った。背景や理由として生成された概念カテゴリーは①学校現場での解決すべき課題への認識と②参加者自身が賛同したICF/ICF-CYの特徴であり、①の解決や②を生かした特別支援教育の推進が活用の目的となっていることが示唆された。また、ICF/ICF-CYの概念的枠組み(理念)としての側面とツールとしての側面とを大別しながらも、実践上は両輪且つ不可分なものであるということが示唆された。併せて、当日はICF/ICF-CY活用に関する特別支援学校を対象にした調査結果も含めて話題提供を行いたい。

2 よりよく子どもを理解するために(齊藤)

障害のある子どもへの適切な支援と指導の実現には、多面的・総合的な状況の捉え及び個々の教育的ニーズの的確に理解が大切だが、障害名や問題行動を優先的にとらえたり、事態の解決の難しさの原因を子どもだけに還元したりする傾向があることも否めない。筆者は、ICF/ICF-CYがそのための有効な手段であると考えており、状態像の把握や指導・支援の計画立案に活用してきた。ICF/ICF-CYなしでもそれらは可能であるが、ICF/ICF-CYの理念の活用により、障害にばかり目を向けるのではなく、子どもの生活機能に目を向け、環境を含めて多面的・総合的な捉えが可能となり、併せてICF-CYの項目の利用により、子どもの状態像の的確なチェックと関係者間での共通言語とし

ても可能性が広がると考えている。

3 学校経営上の課題改善のために(田添)

現在、特別支援学校(肢体不自由)における学校経営は、障害のある児童生徒の自立と社会参加の実現のために教師の専門性を組織的に向上させることが求められているが、障害の重度・重複化、多様化に伴い、一人の教師が児童生徒一人一人の多様な障害特性を適格に把握し、将来を見通して一貫した指導をすることが困難な現状ではないかと考えられる。学校経営の中でも、その柱は教育実践であり、児童生徒一人一人の能力や可能性を最大限に伸ばすことが必要だと考えている。筆者は、その改善のための有効な手段の一つがICF-CYであると考えており、さらにキャリア教育との関連を視野に入れ、全ての児童生徒が自立と社会参加の実現に向けて、児童生徒一人一人の能力や可能性と将来を見据えた指導プログラムを組織的に、実践できるツールであるとともに、医療、福祉等の関係機関と連携しながら、小中高と一貫した教育の実現に向けた有効なツールと考えている。

4 子どもの生活の適切な支援のために(川口)

特別支援学校の寄宿舎では子どもの生活への適切な支援が求められるが、現在や将来の生活観についての指導員間や関係職種との共通理解の弱さ等の課題も見受けられる。筆者は、それらの改善・充実のための有効な手段の一つとしてICF-CYを捉え、本校独自のICF関連図やコードセットの検討を中心に、寄宿舎における生活指導への活用に取り組んできた。その結果、子どもの現在の生活についての幅広い実態把握と、卒業後の自立を目指し、望ましい参加の姿をイメージした実態把握・課題設定・指導につながる可能性が見いだせた。併せて、寄宿舎内だけにとどまらない、教員やその他の関係専門職種との連携のもとでの取組及び本人の主体的な活用の取組についても言及したい。

【指定討論の要旨】

特別支援教育におけるICF-CY活用の意義(島)

特別支援教育は、特殊教育において培われてきた障害のある児童生徒への教育の専門性を、自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点で継承・発展するものである。一方、ICFの派生分類であるICF-CYは、児童生徒の生活を生活機能から見て、その健康状態を全人的に把握するために開発されたものである。したがって、特に個別の教育支援計画の作成における、医療・福祉・労働等の関係者や関係機関同士との共通言語としての役割や、実施・評価・修正(再計画)の流れの中でも十分に活用することができる。と考える。

(TOKUNAGA Akio, MATSUMURA Kanyu, SAITO Hiroyuki, TAZOE Nobuyuki, KAWAGUCHI Tokiwa, SHIMA Harunobu)

自主シンポジウム 21 ICF の学校現場への適用 VI ーあらためて、特別支援教育において ICF-CY を活用する背景に迫るー記録

教育支援部 主任研究員 徳永亜希雄

【企画趣旨】

本シンポジウムは、同テーマのもとで第 42 回大会から継続開催し、今回で 6 回目となった。特別支援学校学習指導要領等の改善のために ICF の考え方を取り入れる必要性の指摘や ICF-CY 日本語訳版検討の動き等を受け、特別支援教育の中での ICF や ICF-CY（以下 ICF/ICF-CY）活用の拡大が予想されることから、今回は今後の本格的な活用に向け、あらためて特別支援教育での ICF-CY 活用の背景について検討することに主眼を置いて企画した。

【各話題提供の要旨】

徳永は、特別支援教育における ICF/ICF-CY 活用経験者等へのインタビューを通じた質的な分析の結果を報告した。活用の背景や理由としては①学校現場での解決すべき課題への認識、②参加者自身が賛同した ICF/ICF-CY の特徴が考えられ、①の解決や②を生かした特別支援教育の推進が活用の目的となっている、とした。また、ICF/ICF-CY の概念的枠組み（理念）としての側面とツールとしての側面とを大別しながらも、実践上は両輪且つ不可分であると述べた。

松村は、国立特別支援教育総合研究所による特別支援学校での ICF/ICF-CY の認知度、活用状況、成果、課題等についての調査研究の速報結果に基づいて報告した。全体の 1/4 の学校で 80%以上が ICF について知っていること、ICF-CY については 80%以上が知っている割合が 6%であること、全体の約 2 割の学校で活用があること等の結果を報告した。また、活用の状況を①活用の場面、②活用の目的、③活用の観点の各項目を用いて尋ねたところ、それぞれに頻度が高い回答があるものの、それら 3 つの組み合わせについては各校でかなりばらつきが見られること等も報告した。

齊藤は、自身の ICF 活用のきっかけがよりよく子どもを理解することができるかと実感したことであったことを述べ、特別支援学校からの地域支援としてかかわった事例を通して、障害名や問題行動ばかりにとらわれない、状態像の把握や指導・支援の計画立案等への ICF/ICF-CY 活用の取組の実際について紹介した。また、ICF/ICF-CY の思考の枠組みの活用により、子どもの多面的・総合的な理解の促進や課題の優先順位の明確化が可能になるとともに、分類項目の活用によって多職種間での情報共有やより客観的な状況把握の促進も可能になると述べた。

田添は、特別支援学校（肢体不自由）の校長の立場から、まず解決すべき学校経営上の課題として、児童生徒の障害の重度・重複化、多様化、教員の人事異動等に伴い、教員が一人一人の多様な実態を的確に把握し、将来を見通した一貫性のある指導をしていくことの難しさを指摘した。その上で、児童生徒の自立と社会参加の実現に向けて組織的に専門的な指導をしていくための手段の一つとして ICF-CY を捉え、さらにキャリア教育の視点も取り入れ、他職種との連携のもとで一貫した教育の実現に向けて検討している取組について報告した。

川口は、特別支援学校寄宿舎指導員の立場から、子どもの生活を広くとらえる視点が大事だと考えられる寄宿舎において、実際場面で生じやすい指導員間でのとらえ方の違いを修正するため

の手段として、ICFを活用し始めたことを述べた。ICF/ICF-CYの枠組みを用いて子どもの卒業後の姿と現在の姿を描き、また、分類項目を用いて作成した独自のコードセットによる評価の取組を通して、指導員の卒業後を見据えた視点と関わり方の変化につながってきていることを紹介した。

手段として、ICFを活用し始めたことを述べた。ICF/ICF-CYの枠組みを用いて子どもの卒業後の姿と現在の姿を描き、また、分類項目を用いて作成した独自のコードセットによる評価の取組を通して、指導員の卒業後を見据えた視点と関わり方の変化につながってきていることを紹介した。

【指定討論及びフロアを交えた議論】

島は、特殊教育で培った専門性を自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点で継承・発展させ、学校だけでなく多重構造で展開するものが特別支援教育であるとした上で、ICF/ICF-CYはその特性から特に個別の教育支援計画の作成における多職種・関係機関同士の共通言語としての役割や、実施・評価・修正(再計画)の流れの中での活用が期待されると述べた。その後、各話題提供者との間で次のような質疑応答を行った。

分析結果から得られた今後の展望について質問を受けた徳永は、活用が必要とされた実践の中の場面、目的、解決すべき課題や方向性、ICF/ICF-CYの中の活用したい部分等の整理の必要性を述べた。調査の自由記述から得られたことについて質問を受けた松村は、活用の状況や成果、課題等について、肯定的なもの、課題を指摘するもの、今後の展望に言及したもの等があり、今後さらに丁寧に分析していく必要性を述べた。学校内ではなく、センター的機能で活用した理由について質問を受けた齊藤は、活用検討時に巡回相談の際に行う機会があり、対象の子どもへの適切な指導や環境への支援を考えるために活用できると考えて取組を開始したこと、現在、当時の勤務校では学校全体で個別の教育支援計画作成時に活用し始めていること等を述べた。学校長としての今後の展望について質問を受けた田添は、教員はツールを知るだけでなく、教育観や人間観を含めて専門性を磨く必要があり、その点からICF/ICF-CYは有用であり、多様な児童生徒の力を最大限に伸ばし、社会参加を目指させるためにチームで検討する際に活用していきたい旨述べた。子ども自身によるICF/ICF-CY活用について質問を受けた川口は、指導員が作成した「ICF関連図」に興味を持った生徒にICF/ICF-CYについて説明をしたところ、理解可能と判断されたこと、自分自身を客観的に見たり、社会の仕組みを学んだりする機会になると考えられること等について述べた。

質疑応答後、島はICF/ICF-CYは今後さらに特別支援教育を推進していく力となり、多職種間の共通のツールとなりえることを述べた。その後、フロアとの間で、分類項目の活用、個別の教育支援計画への活用、パラダイムシフトの必要性、多職種間での共通言語としての活用等について意見が交わされた。翌日に開催された準備委員会企画のICF関連シンポジウムの相乗効果もあったのか、会場は満員で会場に入れず廊下から参加するような状況であり、本学会においてもICF/ICF-CYへの関心が高まっていることを実感した。